



Data

監督・脚本: きうちかずひろ
 原作: 木内一裕『アウト&アウト』
 (講談社文庫刊)
 出演: 遠藤憲一 / 岩井拳士朗 / 白鳥玉季 / 小宮有紗 / 中西学 / 酒井伸泰 / 安藤一人 / 渡辺龍平 / 渋川清彦 / 成瀬正孝 / 阿部進之介 / 竹中直人 / 高畑淳子 / 要潤

👁️👁️ みどころ

原作は木内一裕の『アウト&アウト』、監督はきうちかずひろ。そのオリジナル作は“クール&スマートな犯罪エンターテインメント”が売りだ。NHK大河ドラマ『西郷どん』でも勝海舟役でいい味を見せていた俳優、遠藤憲一が主演！登場人物は、純粹培養の二世議員を除いて、みんな一癖も二癖もあるアウトローばかり。ある事件に巻き込まれた、元ヤクザで探偵の男はその中でいかなる活躍を？

“子連れ狼”ならぬ、血のつながらない小学2年生の女の子との絆と愛がピッタリの“男の魅力”は意外にイケる。ストーリーの面白さ、結末の鮮やかさもお見事だ。本作がヒットすれば、主人公のキャラがピタッとハマっているから、ひょっとしてシリーズ化も……。

■□■今が旬の俳優・遠藤憲一が堂々の主演！シリーズ化も？■□■

『教師師』(18年)は、今年2月21日に逝去した俳優、大杉漣初のプロデュース作にて最後の主演作になった(『シネマ42』46頁)が、本作は今が旬の俳優、遠藤憲一堂々の主演作。木内一裕の原作『アウト&アウト』を監督きうちかずひろが映画化した本作で遠藤が演じるのは、探偵事務所を営む元ヤクザの矢能政男。この設定はたしかに面白いが、現実にはありえないだろう。だって、本作を観ていると、しがな一匹狼の探偵にすぎない矢能は、元のヤクザ組織から追われているわけでもないうえ、今なおおの仲間たちに対してそれなりの立場を保っているようだし、某警察官ともウラのつながりが……。

本作の設定がさらに面白いのは、矢能の事務所がワケありで預かっている小学2年生の少女、黒木栞(白鳥玉季)がいること。この栞が客にお茶を出したりして、矢能の仕事を手伝っているのは明らかに労基法違反だが、元ヤクザが営む探偵事務所なら仕方なし……？

シリーズ作となる映画の主人公にはインパクトのある個性が不可欠。かつての大スター、市川雷蔵や勝新太郎らがそうだったし、年をとってからの中村(萬屋)錦之介は『子連れ

狼』の拝一刀役でシリーズ化を勝ち取った。そう考えると、元ヤクザの私立探偵、そして無愛想ながら子連れで意外に子供には優しいという矢能のキャラは、今が旬の俳優、遠藤にピッタリだ。本作がスマッシュヒットすれば、意外にこれはシリーズ化が狙えるのでは？

■□■この個性は魅力的！男はこうでなくっちゃ！■□■

近時は見るべきTV番組が少なくなり、BS放送を見る比率が高くなった。地上波のチャンネルを回すと、どこもかしこも吉本系の芸人が出て、アホバカおしゃべりばかりしているのうんざり。近時彼らはニュース番組にまで出演し、キャスター風の仕事までやっているから、なおさらうんざりだ。そんな番組に飽き飽きしている私には、本作にみる、ぶっきら棒ながら必要なことだけはハッキリとしゃべる矢能の個性は魅力的。もともと、仕事の中にまで時々入ってくる葉の質問やししゃべりは私には多少うっとうしいが、矢能は意外にそうでもないらしい。それは、一方ではあまり突っ込みすぎない葉の姿勢と、他方では小学2年生と思えないほど従順に矢能の言葉に従う性格によるものだろう。これなら『子連れ狼』のちゃん（拝一刀）と大五郎の関係と同じように、うまくいくのでは・・・。

かつては、三船敏郎が「男は黙って・・・」の代表だったが、本作を見ていると、三船とはスタイルは違うものの、遠藤憲一が「男は黙って・・・」の魅力的なキャラの代表と思ってしまう。本作にはアウトロー俳優の代表ともいえる竹中直人が情報屋として登場し、遠藤といいコンビを組んでいるが、おちゃらけが過ぎる竹中直人のキャラより、男の色気をブンブンさせている遠藤憲一の方が魅力的。やっぱり、男はこうでなくっちゃ・・・。

■□■なぜ俺が？この設定は秀逸！■□■

チラシでは本作を「クール＆スマートな犯罪エンターテインメント！」というフレーズで売っている。しかし、「犯罪エンターテインメント」とは変な合成語だし、そこに“クール”とか“スマート”等の形容詞がつけば、少し反社会的色合いがついてくる。したがって、本作が文部科学省推薦とならないのは当然だが、本作冒頭、元ヤクザの探偵、矢能が陥るワナはかなり用意周到なものだ。

冒頭、矢能がある依頼をぶっきら棒に断るシーンが登場するが、この姿勢は弁護士の私にも共通するもの。探偵も弁護士も、“依頼者迎合型”はダメということだ。しかし、この依頼はまともなものと考えて受けた仕事で、矢能が「取引」の現場に行ってみると、矢能はいきなり死体に対面させられたうえ、マスクをかぶった男（岩井拳士朗）から銃口をつきつけられたから、アレレ。“殺すのは許してやる”と言われたのでひと安心だが、手を縛られるのかと思っているとそうではなく、男は矢能に拳銃を握らせ「殺人の証拠となる拳銃にあんたの指紋をつけた」と言い残して消えていったから、さらにアレレ・・・。

そんな緊急事態後の矢能の一連の処理の素早さ、適確さには、さすが元ヤクザ（幹部）の（腕利き）私立探偵と納得だが、さあ、これは誰が何を狙った陰謀なの・・・？矢能は意地でもそれを調べなければならなくなったが、彼の武器は自分の携帯と人脈だけ。まずは死体の遺品調べだが、そこから出てきたパスポートの名前は安田義行。ある手がかりか

ら矢能が安田の姉に電話をかけると、なんと「弟は3年前にカンボジアで死んでいるはずですが・・・」との返事が・・・。こりゃ一体どうなってるの？

■□■鶴丸代議士と対決！その伏線は？■□■

先日、3年ぶりで解放されたフリージャーナリストの安田純平氏を巡っては“自己責任論”が噴出したが、本作では鶴丸清彦代議士（要潤）がカンボジアで果たした、ある“英雄的行為”が事件の隠されたテーマになる。それは、突然起きたバスの転落事故の中、鶴丸の決死的行動によって一人の少女の命が救われたこと。その行動が奇跡的に一枚の写真として残っていたわけだが、それってホント？ひょっとして、やらせでは？その行為が衆議院議員選挙の直近だったため、そんな疑問が出るまでもなく鶴丸の英雄的行為が絶賛され、拡散された結果、それまで不利を伝えられていた選挙で鶴丸は勝利！以降、代議士として君臨していたが、この男の正体は？

もっとも、そんな話は世の中どこにでもある話で、一匹狼の私立探偵、矢能には何の関わりもない。ところが、マスクをかぶった若い男、池上数馬の恩師である、空手道場を営む武道家、堂島哲士（成瀬正孝）が二世議員である鶴丸の親の代から、裏のトラブルを一手に引き受けていた男であることが判明。そこで、否応もなく矢能は数馬との接点を通して鶴丸との対決を余儀なくされることに。しかして、その対決はいつ？どんな形で？

■□■八方ふさがりから鮮やかな結末へ！こりゃカイカン！■□■

所詮一匹狼の探偵の力なんて知れたもの。そう思っていたが、意外にも矢能の調査能力は上々で、情報屋（竹中直人）の集めた情報ともびつたり一致したからお見事なもの。しかし、現職の衆議院議員の力は大きいし、法治国家、日本では警察の力も強大だ。検察庁の特捜部は、日産の代表取締役・会長カルロス・ゴーンさえ摘発する程なのだから。

もっとも、他方では矢能がコツコツと集めた情報でコツコツと動いても、所詮鶴丸が絡んだ巨悪を暴くことなど不可能。そう思っていると案の定、本作中盤から終盤にかけて矢能は八方ふさがり状態になるのでそれに注目！ニッチもサッチもいかない中、彼は一体どうすればいいの？観客も矢能と一緒にそう考えるはずだ。ところが、ところが・・・。

チラシに「クール&スマートな犯罪エンターテインメント！」と書かれているとおり、本作は切羽つまった状態に陥った矢能が立てた、『三国志』における諸葛孔明の策略の如き“ある計略”に沿って鮮やかな展開を見せていくので、それに注目！もっとも、鶴丸の秘書が意外にワルだったり、国会議員のセンセイがたった一人で矢能の指示どおりに夜中に車を運転して外出したりするから、矢能が仕掛けたワナにはまるのだが、それもこれもすべて矢能の計略の見事さによるものだ。

本作クライマックスにみる矢能の知力は、まさに諸葛孔明並み。そこでは、矢能の知力と鮮やかな計略に敬服すると共に、その展開に思わずカイカン！そのストーリーは結構入りくんでいるが、スピード感と爽快感を伴う鮮やかな展開は、あなた自身の目でしっかりと。

2018（平成30）年11月30日記